

脱成長社会の原理とレジャー 地球環境問題、縮減、ローカリゼーションを補完するもの

犬塚潤一郎 [実践女子大学]

キーワード：脱成長、ローカリゼーション、地球環境

近代性批判と環境問題

労働の対概念としてのレジャーの探求は、自ずから労働偏重型の社会や、労働を基盤とする人間観・社会観への批判を生み出してきた。一方、労働市場の悪化、雇用問題や低賃金、格差問題の広まりは、レジャーの意味を問うことへの社会的関心の低下をもたらしているようである。しかし、今日の経済不況が景気の波の一時期にあたるのではなく、近代的な経済モデルの構造的な限界によるものであるとすれば、これからの社会モデルを考えるにあたって、レジャーの再考は新たな、そして本質的な意味を持つことになるだろう。

経済は発展と破綻とを繰り返しながら全体として成長を続けてきた。しかし今日の地球環境問題やグローバルな社会格差問題は、従来の経済モデルに対して、いわば系の外側からの構造的課題として現れている。

従来の考え方からすれば、不況期には技術革新や生産性向上による再成長が期待されるが、地球環境問題は物質経済の全体に対する制約である。二酸化炭素排出権取引や炭素税など、外部不経済の内部化の取り組みも、エネルギー・資源の埋蔵量・可採年数の事実と需要・人口増大との対比等から見れば、現実的な解決を導くものではない。

気候変動やエネルギー・資源の枯渇、生物多様性の減少など、地球環境問題を、人間を取り巻く環境の問題ではなく、人間活動の問題であると捉え、人間存在と社会のモデルの再構築をこそ検討すべきだろう。つまり現実には、如何にこの問題に対処する（手段と道具を問う）だけでなく、何故（存在と行動の理由）を問う努力を必要としているのだ。

ここに、近代性批判としてのレジャーの意味を問うことの本質的な意義がある。

グローバリゼーションからローカリゼーションへ

近代性 modernity 批判は今日、芸術や思想の領域におけるよりはむしろ、西洋化というグローバリゼーション（西洋の教育、医療、司法、行政、技術、諸制度の適用、さらには生活様式の一般化）への批判の意味合いを強くしている。西洋型社会制度とライフスタイルへの一般の関心は、社会と文化の均質化を憂うような一般的状況から、格差・雇用などの、多国籍企業multinationalsによる資本主義経済のグローバル化global capitalismがもたらした事態への批判へと、主な焦点を移しているといえるだろう。

ここで注目したいのは、環境問題とこのグローバリゼーションとが、近代性という存在論的には同じ問題性にあることである。

グローバリゼーションという社会運動の基底にあるのは、普遍的な人間存在への確信と普遍的理性への信頼である。それは近代科学・人文主義・個別主体によって特徴付けられるものである。その意味で、企業活動のグローバル化も、その依拠する存在論の自然な成り行きの結果であって、利己的な利益追求などの悪意を見る批判は原理的には有効でない。

近代性批判の対象として明らかになった、理性と事物操作（としての世界）を統一的に

捉えるモデルの一般化が、グローバルな企業活動という経済的な、および地球環境危機という、2つの現実として現れている。

グローバリゼーションに対するローカリゼーションは、概念的に対比的なモデルの提示である。地球規模に対する地域規模とは、普遍的な世界認識に対する個別的・多元的な世界の重視であり、抽象性に対する具体性、経済的には成長に対する縮減、競争に対しては互酬、収奪に対しては保護・共生を対置させるモデルであり行動規範である。

このような転換は、制度や仕組みだけでなく、意識や価値観の転回を伴わなければ、不都合なだけでなく抑圧や不幸福感を伴うことになる。マイナス成長と失業とがすべての政府の悪夢であるように、思想の転換のないところに新たな施策はない。人は何を求めて生きる存在であるのか。社会はそれにどう応えるシステムであるべきか。レジャー概念の再考は、ローカリゼーションの志向のもとで、人として生きる意味を問い直すことにある。

経済というモデルとレジャー

グローバリゼーション批判は、経済成長（資本蓄積）の一般化に対するものである。競争が不平等を拡大し、自然の略奪をまさに限界まで進めている現実に対するものである。しかし問題解決を原理的な次元にまで求めるとすれば、それは近代的存在論に対する批判にあり、発展（＝開発）をすべての人類の目標であるとするところへの反省の内にある。

経済がグローバルな現れ方（非空間的活動）をすることは、数学的モデル（世界観）に準拠することである。数学のモデルが基本的に無限である一方、経済活動が行なわれるところの現実世界は、人間の社会としても地球という惑星の規模でも、有限である。この明らかかなことが具体的な活動においてほぼ無視されるのは、普遍的人間の自由・可能性と、各人固有の自己の現実・自分の居場所との、二重性に由来する。

さらに、経済発展（競争）は必然的に敗者と奪われる者を生むが、敗者の個別的現実よりも勝者のそれのみに人が目を向けてきたのは、その矛盾を外部に転嫁し、内部には成長しかないように見せてきたためである。先進国の成長は矛盾を外側（途上国および地球環境）に転嫁してきた。そしてその限界が、グローバルな格差問題および生態系の再生能力を上回る生産・消費活動として、現実化してしまったのである。

有限の世界で無限のモデルを運用することには、情報産業がそれを一層加速してきた面がある。そこには、ソフトウェアのような直接の物質原料を伴わない商品の発展もみられる一方、人間性や社会性の商品化と消費という、もうひとつの限界も明らかにしてきた。

さらに、数学的モデルが時間軸に対称であることと異なり、地球環境、文化、人間性と社会性の収奪と破壊が一般に不可逆であることが、この危機を一層深刻なものとしている。生物が生まれ、成長し、死ぬことを逆方向に進むことができないように、進化も、地球の成立も、総体として一方向なのである。

ローカリゼーションは、自然および社会の資源化・商品化ではなく、自然環境および社会関係に、自分の生活様式を適応させてゆくプロセスである。そこでは、人間の能力として、具体的な環境と社会関係への感受性を増すことが重要である。

レジャー追求の根底にある脱近代性の志向を、この新たな社会状況のもとに捉え直すこと。レジャーの意味と課題とをそこに一致させることができるのではないだろうか。